

---

# 世界で一番好きなひと

美雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界で一番好きなひと

### 【Nコード】

N3034B

### 【作者名】

美雪

### 【あらすじ】

世界中で一番近くて遠いひと。あたしは親友に恋をした。

今あたしの髪の毛はそこらへんのチャラチャラした男の子より、ずっと短い。

真っ黒で短い髪にスカートは似合わないから、ジーンズしかはかない。

髪の毛をセットするのがめんどくさいからいつもキャップをかぶってる。

『お前は女ちゃう』

『お前とおると気使わんですむからええわ』

もうとつくの昔に慣れっこになった言葉。  
それでも。

『なあ明日お前暇？？』

好きな人にこんなコト言われたらドキドキだってるし。

『んー多分暇。何で？』

そっけなく答えても、内心結構期待したりもする。

『一緒に勉強せえへん？デニーズで』

そんな些細な誘いがすごくすごく嬉しくて。

なのに。

『なんかさあ、坂井サンと一緒に勉強しよって言われてさあ。二人てやつぱちよい気まずいやん。』

…それはヒドくないかい？

『お前おつてくれたら氣イ楽やからなあつて。俺、女と喋るん苦手やから』

『何なん、自分坂井サン狙いなん？』

あたし今ちゃんと笑いながら言えてるかな。

『ハア？そんなんちゃうわっつ』

顔赤くなってますけど。

『…そおなんやあ。なんや、そやったらあたしおらんほつがええやんか』

てかそんな場所にいるのはあたしが辛い。

『違つてゆうつとるやろ。があああ！！！！』

顔を真っ赤にしてあたしが座っている椅子をゲシゲシ蹴るのはやめてくれませんか？

『なんかなあ、あの子は俺ん中でアイドル的存在やねん！  
なんか女の子らしくて、可愛くて、守つてやりたなんねん。手出そうなんて思えへん』

そんなまつすぐな目をして、そんなまつすぐなことを言わないで。

『はいはい。まあ明日は二人でお勉強頑張ってくださいあい。』

あー、あたしも帰るわ』

目に浮かんだ涙を見られなくてあたしはそのまま席をたった。

背中の方からなんだか慌てた声が追ってきたけれど、あたしは振り返らなかった。

どこをどう歩いたか、気づけば家についている。

ドアをあけると、殺風景な私の部屋が主を包み込んでくれた。

可愛い置物もないし、ポスターなんかも貼ってない。

全くもって女の子らしくなんかナイ部屋だけど。その中に不釣り合いに置いてある、くまのぬいぐるみは、あいつがくれた。

なんとなくブーたれたような顔がお前そっくりだ、と笑いながらUFOキャッチャーでとったそいつを渡してくれたのだった。

どうゆう意味よ、とむくれてみせながらも嬉しさは隠せなくて。

ブーちゃんと密かに命名して、部屋の一番目立つ場所に置いていることを、あいつはきつと知らない。

だってあいつは最悪の鈍感バカ男だから。

そんなバカ男をもうどうしようもなく好きになってしまったあたしはその上をゆく奇跡のバカ女なんだろう。

無性に腹がたつて、何故だかお腹がすいて、冷蔵庫をみたけどあるのは酒のあてばかりで。

まったくもって女の子らしくなくて我ながら呆れてしまった。  
もういつそのことやけ酒だーと思ったら、ビール一缶すらもなかった。

何がなんだかわからないけどとにかく悲しくて悲しくて。

私は声をあげて泣いた。

子供のように大きな声をあげて。

その時、玄関のチャイムがなった。

煩いんだよ、バカヤロ。無視し続けていたけれど、チャイムは鳴り止まない。

鈍感馬鹿男は諦めをしない馬鹿だから。

もう30分は鳴り続けている。  
根負けしてあたしはドアをあけた。

『やっと開いたあ…ちょ、お前顔やばいで』

開けたドアを思いっきり閉めてやろうとしたら、左腕一本で止められた。

いくら力を込めても閉まらない。

『男の力にかなうわけないやろ。』

笑いながらいつて部屋の中に入ってくる。

『出ていけアホ』

かまわず部屋に侵入して、勝手にソファに座っている。

『出ていくかアホ。んま機嫌なおして』

言いながらコンビニの袋を差し出してきた。  
中をみると

『なあ…ビール持つてくる意味がわからん』

普通こうゆうときは可愛くケーキとかじゃないんだろうか。

まあ甘いのもそんなに好きじゃないけど。

『いや、こーゆうときは飲まなな。んでお前ん家いつきてもアテはあるのに酒ねえし』

笑いながらビールのフタを開けてわたしてくれた。

あんまり癪だったから奪い取って一息に飲んでやった。

『馬鹿、んな飲み方すんな女のくせに』

その言葉が悲しく胸に刺さって、あたしはもう何も言えなくなった。

『…そんな顔すんなや馬鹿』

『馬鹿やもん。知ってるもん。いっつも、男みたいや、可愛げなさすぎやゆうのに、なんで女のくせになんてゆうん？

あたしやったら何ゆうても傷つかへんとでも思ってるん？

あたしだって女やで。

あたしのことちゃんと女として見てよ』

こんなこと言うつもりじゃなかったのに。

もう友達にも戻れないかも。

ああそんな困った顔をしないでほしい。

『…知ってるよ。お前が女なことぐらい。

俺のこと好いてくれとることぐらい。

ゲーセンでとったようなぬいぐるみに名前つけて飾ってるんお前く

らいや』

もう私は馬鹿以外のなにものでもないのかもしれない。  
とてつもない脱力感に襲われながら尋ねた。

『…何で知ってるんよ?』

『この前飲んだ時、酔ってゆうてた。

ぶーちゃんに触るなぁーとかなんとか。

酒弱いくせに飲んべえやからたち悪いわ』

笑いながらいうあいつの顔をみてるとなんだかとても切なくなってしまう。

『今もお前顔真っ赤。ビールで酔ったん?』

お酒のせいなんかじゃない。

自分の気持ちにきづかれてたのが照れくさくて、顔がものすごくあつい。

この人は鈍感でも馬鹿でもなかったんだ。

それどころかものすごく他人の心に敏感で優しい人だ。

あたしの気持ちにずっと気づかないふりをしてくれていたんだ。

『お前はほんまええ奴やで。ほんまに。んま大切な親友や。絶対ええ人みつけるよ』

涙がとまらない。

目の前には泣きそうな顔をした男がひとり。

あなたには笑っていてほしいから。

『あんだ、何か、勘違い、してへん?』



しゃくりあげながらあたしはいった。

『あたしにはなあ、めっちゃ素敵な彼氏がおってなあ、今アメリカやねん。帰ってきたら結婚するねん』

もう涙はでてこない。

笑顔すら浮かべて言い放つ。

『しゃあなし式には呼んでやってもいいで…親友』

胸がキリキリ痛いけど。

あたしの何倍もきつと目の前のこいつは心が痛いんだろうから。もう泣くわけにはいかないんだ。

困ったように笑いながらあいつは言った。

『…もう俺帰るな。なあ、何があってもお前見捨てたりせんから。だから無理すんな』

あいつは帰っていった。

張り付けた笑顔のままあたしは涙をながした。

世界中で一番近くて遠いひと。

大好きだよ、親友。ずっとずっと大好きだよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3034b/>

---

世界で一番好きなひと

2010年12月9日03時28分発行